

12月4日から10日までは人権尊重週間

差別に向き合い 地域と学校が共に学ぶ

市内各校区では、地域の皆さんが取り組む人権啓発活動が行われています。久留米で、最初に校区人権啓発推進協議会（以下、「人権協」という）を組織した、大橋校区の柳瀬和彦さんと、同校区人権協の皆さんに話を聞きました。

教師として人権・同和教育に熱心に取り組むほか、校区運動会を立ち上げ、住民が交流する機会を大切にされた柳瀬さん



■大橋校区人権協の皆さん
(前列右から) 久保理恵子人権啓発推進員、西村英治会長、柳瀬さん、古賀芳子人権啓発推進員
(後列右から) 山川博香サポーター、PTA 代表の末次佳奈子さん、中村和正サポーター



思いを受け継ぎ地域で学ぶ

— 柳瀬さんの思いを受け継いだ大橋人権協の皆さんに聞きました
西村 柳瀬さんには、地域と学校が一緒に人権問題に取り組む土台を作っていたいただいたと感謝しています。定期的に、人権協や教師、PTAが集まり、気軽に楽しく啓発に取り組んでいます。推進員の任期満了後も「サポーター」として学び続ける人達がいるのは心強いですね。

久保 大橋小では、人権学習の授業を地域の人も参観しています。子どもたちの成長を見て「教育にはこんなに人権意識を育む力があるんだ」と驚かされます。

偏見に苦しむ子との出会い

— 柳瀬さんに人権問題に取り組んだきっかけを聞きました
小学校の教員をしていた70年前、一人の子どもが「外国人の子だ」と周りの子からいじめられたことがありました。「外国人」という言葉を、差別するために使っていたのです。もちろん、国籍がどこであったとしてもいじめていい理由にはなりません。偏見で苦しんでいる子どもの姿を見て、この差別意識

中村 5年生と人権協と一緒に「菊池恵楓園」に行つてハンセン病について学んだこともありです。子どもたちが得た気づきを、校区に住む大人に発表し、地域と学校が共に学び続けています。

自分が被災し気づいたこと

西村 7月の大雨では、自宅が床上浸水し、多くの人が片付けに来てくれて助かりました。これまで、さまざまな啓発活動をしてきたので、困っている人の気持ちを分かっているつもりでした。実際に助けてもらう側になり、本当に相手が求めていることに自分は寄り添えていたのかと問い直す機会になりました。



はなくさないといけなく強く思いました。
私が住んでいる大橋校区でも、さまざまな場面で差別がありました。校区に住む外国人に「よそもん」と言ったり、「女性は夫や子に尽くせ」という文化があったり。この間違つた認識を見過ごしてはいけない、住民自らが学び、差別をなくしていかなければならないという思いを抱えていました。

市内初の人権協

平成6（1994）年に、久留米市に人権啓発推進員制度ができ、各地域で人権協を立ち上げる動きが高まっていました。大橋小がある屏水中校区では小学校同士の交流が盛ん。他校区にも広がるよう、平成9（1997）年に大橋校区人権協を立ち上げました。同年には屏水中校区全てに、今では市内全校区に設置されました。

私が地域で部落差別の話をする時「知らんもんで知ってしまふじゃないか」と言われたことがあります。大人も子どもも正しく学



12月に開催される人権啓発の講演会や作品展示の情報はこちらから



ました。このような気づきを皆さんと共有したいですね。

共に学ぶ人権意識を新たに

西村 人権は、社会の根底にある必要なものです。差別を生むもの、なくすのも人間。人権が守られてこそ生活が成り立ちます。そのためには、家庭や学校、地域が交わり、継続して学ぶことが大切です。日頃からさまざまな人と触れ合ったり、校区で開催される「人権フェスタ」や人権講演会などに参加し、皆で学び続けていきましょう。

◎人権啓発センター（☎0942・307500、FAX0942・307501）